

第一 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

与えられた困難を人間の力で解決しようとして営まれるテクノロジーには、問題を自ら作り出し、それをまた新たな技術の開発によって解決しようとするというかたちで自己展開していく傾向が、本質的に宿っているように私には思われる。科学技術によって産み落とされた環境破壊が、それを取り戻すために、新たな技術を要請するといった事例は、およそ枚挙にいとまないし、感染防止のためのワクチンに対してウイルスがタイセイ^aを備えるようになり、新たな開発を強いられるといったことは、毎冬のように耳にする話である。東日本大震災の直後稼働を停止した浜岡原発に対して、中部電力が海拔二二メートルの防波堤を築くことによつて、「安全審査」を受けようとしているというニュースに接したときも、同じ思いがリフレインするとともに、こうした展開にはたして終わりがあるのだろうかという気がした。技術開発の展開が無限に続くとは、たしかにいい切れない。次のステージになが起ころのか、当の専門家自身が予測不可能なのだから、先のことは誰にも見えないというべきだろう。けれども科学技術の展開には、人間の営みでありながら、有無をいわず人間をどこまでも牽引^{けんいん}していく不気味なところがある。いったいそれはなんであり、世界と人間とのどういった関係に由来するのだろうか。

医療技術の発展は、たとえば不妊という状態を、技術的克服の課題とみなし、人工受精という技術を開発してきた。その一つ体外授精の場合、受精卵着床の確率を上げるために、排卵誘発剤を用い複数の卵子を採取し受精させたうえで子宮内に戻す、といったことが行なわれてきたが、これによつて多胎妊娠の可能性も高くなった。多胎妊娠は、母胎へのフィジカルな影響や出産後の経済的なことなど、さまざまな負担を患者に強いるため、現在は子宮内に戻す受精卵の数を制限するようになってきている。だが、この制限によつても多胎の「リスク」は、自然妊娠の二倍と、なお完全にコントロールできなかったわけではないし、複数の受精卵からの選

扱、また選択されなかった「もの」の「処理」などの問題は、依然として残る。

いずれにせよ、こうした問題に関わる是非の判断は、技術そのものによって解決できる次元には属していない。体外授精に比してより身近に起こっている延命措置の問題。たとえば胃瘻^{いろう}などは、マスコミもとりあげ関心を惹く^ひようになったが、もはや自ら食事をとれなくなった老人に対して、胃に穴をあけるまでしなくても、鼻からチューブを通して直接栄養を胃に流し込むことは、かなり普通に行なわれている。このような措置が、ほんのその一部でしかない延命に関する技術の進展は、以前なら死んでいたはずの人間の生命をキユウサイ^bし、多数の療養型医療施設を生み出すに到っている。

しかしながら老齡の人間の生命をできるだけ長く引き伸ばすということは、可能性としては現代の医療技術から出てくるが、現実化すべきかどうかとなると、その判断は別なカテゴリーに属す。「できる」ということが、そのまま「すべき」にならないのは、核爆弾の技術をもつことが、その使用を是認することにならないのと同様である。テクネー^(techné)である技術は、ドイツ語 Kunst の語源が示す通り、「できること(Können)」の世界に属すものであって、「すべきこと(sollen)」とは区別されねばならない。

テクノロジーは、本質的に「一定の条件が与えられたときに、それに応じた結果が生ずる」という知識の集合体である。すなわち、「どうすればできるのか」についての知識、ハウ・トゥーの知識だといってよい。それは、結果として出てくるものが望ましいかどうかに関する知識、それを統御する目的に関する知識ではないし、またそれとは無縁でなければならぬ。その限りのところでは、テクノロジーは、ニュートラルな道具だと、いえなくもない。ところが、こうして「すべきこと」から離れているところに、それが単なる道具としてニュートラルなものに留まりえない理由もある。

テクノロジーは、実行の可能性を示すところまで人間を導くだけで、そこに行為者としての人間を放擲^{ほうてき}するのであり、放擲された人間は、かつてはなしえなかったがゆえに、問われることもなかった問題に、しかも決断せざるをえない行為者として直面する。

妊婦の血液検査によって胎児の染色体異常を発見する技術には、そのまま妊娠を続けるべきか、中絶すべきかという判断の是非を決めることはできないが、その技術と出会い行使した妊婦は、いずれかを選び取らざるをえない。いわゆる「新型出生前診断」が

二〇一三年四月に導入されて以来一年の間に、追加の羊水検査で異常が認められた妊婦の九七%が中絶を選んだという。

療養型医療施設における胃瘻や経管栄養が前提としている生命の可能な限りの延長は、否定しがたいものだし、それを入所条件として掲げる施設があることも、私自身経験して知っている。だが、飢えて死んでいく子供たちが世界に数えきれないほど存在している現実を前にするならば、自ら食事をとることができなくなった老人の生命を、公的資金の投入まで行なって維持していくことが、社会的正義にかなうかどうか、少なくとも私自身は躊躇なく判断することができない。

ここで判断の是非を問題にしようというのでは、もちろんないし、選択的妊娠中絶の問題一つをとってみても、最終的な決定基準があるなどとは思えない。むしろ肯定・否定を問わず、いかなる論理をもつてきても、それを基礎づけるものが欠けていること、そういう意味で実践的判断が虚構的なものでしかないことは明らかだと、私は考えている。

たとえば現世代の化石燃料の消費を将来世代への責^{レスポンス}任^{レスポンシビリティ}によって制限しようとする論理は、物語としては理解できるが、現在存在しないものに対する責任など、^{レスポンス}応答の相手がいないという点で、想像力の産物でしかないといわざるをえない。同じ想像力を別方向に向ければ、そもそも人類の存続などといったことが、この生物種に宿る尊大な欲望でしかなく、人類が、他の生物種から天然痘や梅毒のように根絶を祈願されたとしても、かかる人類殲滅の^{せんめつ}野望は、人間がこれら^{おの}己れの敵に対してもつている憎悪と、本質的には寸分の違いもないといえるだろう。その他倫理的基準なるものを支えているとされる概念、たとえば「個人の意思」や「社会的コンセンサス」などが、その美名にもかかわらず、虚構性をもっていることは、少しく考えてみれば明らかである。主体となる「個人」など、確固としたものであるはずがなく、その判断が、時と場合によって、いかに動揺し変化するかは、誰しもが経験することであり、そもそも「個人の意思」を書面で残して「意思表示」とすること自体、かかる「意思」なるものの可変性をまざまざと表わしている。また「コンセンサス」づくりの「公聴会」なるものが権力関係の追認でしかないことは、私たち自身、いやというほど繰り返し経験していることではなからうか。

だが、行為を導くものの虚構性の指摘が、それに従っている人間の愚かさの摘発に留まるならば、それはほとんど意味もないことだろう。虚構とは、むしろ人間の行為、いや生全体に不可避的に関わるものである。人間は、虚構とともに生きる、あるいは虚

構を紡ぎ出すことによって己れを支えているといってもよい。問題は、テクノロジーの発展において、虚構のあり方が大きく変わったところにある。テクノロジーは、それまでできなかったことを可能にすることによって、人間が従来それに即して自らを律してきた虚構、しかもその虚構性が気づかれなかった虚構、すなわち神話を無効にさせ、もしくは変質を^cヨギなくさせた。それは、不可能であるがゆえにまったく判断の必要がなかった事態、「自然」に任ずることができた状況を人為の範囲に落とし込み、これに呼応する新たな虚構の産出を強いるようになったのである。そういう意味で^エテクノロジーは、人間的生のあり方を、その根本のところから変えてしまう。

(伊藤徹『芸術家たちの精神史』 一部省略)

〔注〕 ○排卵誘発剤——卵巣からの排卵を促進する薬。

○多胎妊娠——二人以上の子供を同時に妊娠すること。

○胃瘻——腹壁を切開して胃内に管を通し、食物や水、薬などを流入させる処置。

設問

(一) 「科学技術の展開には、人間の営みでありながら、有無をいわず人間をどこまでも牽引していく不気味なところがある」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。

(二) 「単なる道具としてニュートラルなものに留まりえない理由」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。

(三) 「実践的判断が虚構的なものでしかないことは明らかだ」(傍線部ウ)とあるが、なぜそういえるのか、説明せよ。

(四) 「テクノロジーは、人間的生のあり方を、その根本のところから変えてしまう」(傍線部エ)とはどういうことか、本文全体の論旨を踏まえた上で、一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ(句読点も一字と数える)。

(五) 傍線部 a・b・c のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a タイセイ b キユウサイ c ヨギ

第二 二 問

次の文章は、『源氏物語』真木柱卷の一節である。玉鬘たまかづらは、光源氏みづらぎ（大殿）のかつての愛人であった亡き夕顔と内大臣との娘だが、両親と別れて筑紫国で育った。玉鬘は、光源氏の娘として引き取られ多くの貴公子達の求婚を受けるかたわら、光源氏にも思慕の情を寄せられ困惑する。しかし意外にも、求婚者の中でも無粋な鬘黒大将ひげくろの妻となつて、その邸に引き取られてしまった。以下は、光源氏が結婚後の玉鬘に手紙を贈る場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

二月にもなりぬ。大殿は、さてもつれなきわざなりや、いとかう際々きはきはしうとしも思はでたゆめられたる妬ねたきを、人わろく、すべて御心にかからぬをりなく、恋しう思ひ出でられたまふ。宿世すくせなどいふものおろかならぬことなれど、わがあまりなる心にて、かく人やりならぬものは思ふぞかしと起き臥ふし面影にぞ見えたまふ。大将の、をかしやかにわららかなる気けもなき人に添ひるたらむに、はかなき戯たはぶれ言もつつましうあいなく思おぼされて、念じたまふを、雨いたう降りていとのとやかなるころ、かやうのつれづれも紛らはし所に渡りたまひて、語らひたまひしさまなどの、いみじう恋しければ、御文奉りたまふ。右近がもとに忍びて遣はすも、かつは思はむことを思すに、何ごともえつづけたまはで、ただ思はせたることどもぞありける。

「かきたれてのどけきころの春雨にふるさと人をいかにしのぶや

つれづれに添へても、恨めしう思ひ出でらること多うはべるを、いかでかは聞イこゆべからむ」などあり。

際ひまに忍びて見せだてまつれば、うち泣きて、わが心にもほど経るままに思ひ出でられたまふ御さまを、まほに、「恋しや、いかで見たてまつらむ」などはえのたまはぬ親にて、げに、いかでかは対面もあらむとあはれなり。時々むつかしかりし御気色けしきを、心づきなう思ひきこえしなどは、この人にも知らせたまはぬことなれば、心ひとつに思いつづくれど、右近はほの気色見エけり。いかなりけることならむとは、今に心得がたく思ひける。御返り、「聞こゆるも恥づかしけれど、おぼつかなくやは」とて書きたまふ。

「ながめする軒のしづくに袖ぬれてうたかた人をしのばざらめや

ほどふるころは、げにことなるつれづれもまさりはべりけり。あなかしこ」とるやめやく書きなしたまへり。

ひきひろげて、玉水のごぼるやうに思さるるを、人も見ばうたてあるべしとつれなくもてなしたまへど、胸に満つ心地して、かの昔の、尚侍の君を朱雀院の後の切にとり籠めたまひしをりなど思し出づれど、さし当たりたることなればにや、これは世づかずぞあはれなりける。好いたる人は、心からやすかるまじきわざなりけり、今は何につけてか心をも乱らまし、似げなき恋のつまなりや、とさましわびたまひて、御琴掻き鳴らして、なつかしう弾きなしたまひし爪音思ひ出でられたまふ。

〔注〕 ○つれなきわざ——鬚黒が玉鬘を、光源氏に無断で自分の邸に引き取ったこと。

○紛らはし所——光源氏が立ち寄っていた玉鬘の居所。

○右近——亡き夕顔の女房。玉鬘を光源氏の邸に連れてきた。

○隙に忍びて——鬚黒が不在の折にこっそりと。

○うたかた——泡がはかなく消えるような少しの間も。

○尚侍の君を朱雀院の後の切にとり籠めたまひしをり——当時の尚侍の君であつた朧月夜を、朱雀院の母后である弘徽殿太后が強引に光源氏に逢えないようになさつた時のこと。現在の尚侍の君は、玉鬘。

設問

- (一) 傍線部ア・イ・オを現代語訳せよ。
- (二) 「げに、いかでかは対面もあらむとあはれなり」(傍線部ウ)とは誰のどのような気持ちか、説明せよ。
- (三) 「いかなりけることならむ」(傍線部エ)とは、誰が何についてどのように思っているのか、説明せよ。
- (四) 「るやるやしく書きなしたまへり」(傍線部カ)とあるが、誰がどのようにしたのか、説明せよ。
- (五) 「好いたる人」(傍線部キ)とは、ここではどういう人のことか、説明せよ。

第三問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

齊奄家畜一猫。自奇之。号於人曰虎猫。客説之曰、「虎誠猛

不^ル如^カ龍之神^{ナルニ}也。請^フ更^ヘ名^ヲ曰^ニ龍猫^ト。又客説^{キテ}之^ニ曰^{ハク}、「龍固^{ハもとヨリ}神^ニ於^カ

虎^ニ也。龍昇^{ルニ}天^ニ。須^ニ浮^ニ雲^ニ。雲其^レ尚^キ於^ニ龍^{ヨリ}乎。不^レ如^カ名^{ツケテ}曰^{フニ}雲^ト。又客説^{キテ}之^ニ

曰^{ハク}、「雲靄^{ウン}蔽^レ天^ヲ。風倏^{たちまちニシテ}散^ズ之^ヲ。雲固^{ヨリ}不^レ敵^{カナハ}風^ニ也。請^フ更^ヘ名^ヲ曰^レ風^ト」。

又客説^{キテ}之^ニ曰^{ハク}、「大風颿^{へう}起^{キスルモ}。維屏^{たふせグニ}以^テ牆^{シやうヲ}。斯足^{すなはチ}蔽^{フニ}矣。風其^レ如^レ牆^ヲ何^{セン}」。

名^{ツケテ}之^ニ曰^{ハバ}「牆猫^ト可^{ナリト}」。又客説^{キテ}之^ニ曰^{ハク}、「維牆雖^モ固^{ナリト}。維鼠穴^{うがタバ}之^ニ。牆斯^チ圯^{クブル}矣」。

牆^ニ又^レ如^レ鼠^ヲ何^{セン}。即^チ名^{ツケテ}曰^{ハバ}「鼠猫^ト可^ト也」。

東里丈人嗤^{わらヒテ}之^ヲ曰^{ハク}、「噫^あ嘻^あ、捕^{フル}鼠^ヲ者^ハ故^{もとヨリ}猫^也也。猫^ハ即^チ猫^{ナル}耳[。]胡^ソ為^ラ自^ラ失^{ハン}ニ本^ヲ真^ト哉^ト。」

(劉元卿『賢奕編』による)

〔注〕

- 齊奄——人名。
- 霽——もや。
- 颯起——風が猛威をふるうこと。
- 牆——塹。
- 圮——くずれること。
- 東里——地名。
- 丈人——老人の尊称。
- 嗤——嘲笑すること。

設問

- (一) 傍線部 a・b・c を現代語訳せよ。
- (二) 「名^レ之^曰牆猫可^レ」(傍線部 d) と客が言ったのはなぜか、簡潔に説明せよ。
- (三) 「牆^又如^レ鼠何[」](傍線部 e) を平易な現代語に訳せ。
- (四) 「東里丈人[」](傍線部 f) の主張をわかりやすく説明せよ。

第四問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

住む所に多少の草木があつたのは、郊外の農村だつたからである。もちろん畑たんぼの作物があり、用水堀ぼりぞいに雑木の藪やぶもあり、植木屋の植溜うえだめもいくつかあつたし、またどこの家にもたいがい、なにがしか青いものが植えてあつた。子供たちはひとり、木や草に親しんでいた。

そういう土地柄のうえに、私のうちではもう少しよけいに自然と親しむように、親が世話をやいた。私は三人きょうだいだが、めいめいに木が与えられていた。不公平がないように、同じ種類の木を一本ずつ、これは誰のときめて植えてあつた。だから蜜柑みかんも三本、柿かきも三本、桜つばきも三本ずつあつて、持主がきまつていた。持主は花も実も自由にしていいのだが、その代り害虫を注意すること、施肥をしてもらうとき、植木屋さんに礼をいっておじぎをすること等々を、いいつかつていた。敷地にゆとりがあつたから、こんなこともできたのだらうが、花の木実の木と、子供の好くように配慮して、関心をもたせるようにしたのだとおもう。

父はまた、木の葉のあてあて、つこをさせた。木の葉をとつてきて、あてさせるのである。その葉がどの木のものか、はつきりおぼえさせるためだろう。姉はそれが得意だつた。枯れ葉になって干からびていても、虫が巢ねにして筒のように巻きあげているのも、羽状複葉の一枚をとつてきたのでも、難なく当ててしまう。まだ葉にひらいていない、かがまつた芽でさえ、ぴたりとあてた。私もいくつかは当てることができるのだが、干からびたのなどだされると、つかえてしまう。そこを横から姉が、さつと答えて、父をよるこぼす。私はいいい気持ではなかつた。姉のその高慢ちぎがにくらしく、口惜くちしかつた。しかし、どうやっても私はかなわなかつた。そんなにくやしがるなら、自分もしつかり覚えればいいものを、そこが性格だろうか、どこか締りがゆるいとみえて、不確かにずつこけた。ここが出来のいい子と出来のわるい子との、別れ道だつた。

出来のいい姉を、父は文句なくよろこんで、次々にもっと教えようとした。姉にはそれが理解できるらしかったが、私はそうはいかなかった。姉はいつも父と連立ち、妹はいつも置き去りにされ、でも仕方がないから、うしろから一人ずついていく。嫉妬の淋しさがあつた。一方はうまれつき聡いという恵まれた素質をもつ上に、教える人を喜ばせ、自分もたのしく和気あいあいのうちに進歩する。一方は鈍いという負目をもつ上に、教える人をなげかせ、自分も楽しまず、ねたましさを味う。まことに仕方のない成りゆきである。環境も親のコーチも、草木へ縁をもつ切掛けではあるが、姉への嫉妬がその切掛けをより強くしているのだから、すくなくならず気がさす。

しかし、姉は早世した。のちに父は追憶して、あれには植物学をさせてやるつもりだったのに、としばしば残念がってこぼしていたところを見ると、やはり相当の期待をもっていたことがわかるし、その子に死なれてしまつて気の毒である。

出来が悪くても子は子である。姉がいなくなつたあとも、父は私にも弟にも、花の話木の話をしてくれた。教材は目の前にたくさんある。大根の花は白く咲くが、何日かたつうちに花びらの先はうす紫だの、うす紅だのに色がさす。みかんの花は匂いがいいばかりではない、花を裂いて、花底をなめてみれば、どんなにかぐわしい蜜を貯えていることか。あんずの花と桃の花はどこがちがうか。いぬえんじゅ、猫やなぎ、ねずみもち、なぜそんなことなのか知つてるか。蓮の花は咲くとき音がするといわれているが、嘘かほんとか、試してみる気はないか——そんなことをいわれると、私は夢中になつて早起きをした。私のきいた限りでは、花はボンなんていわなかつた。だが、音はした。こすれるような、ずれるような、かすかな音をきいた。あの花びらには、ややこわい縦の筋が立つていて、ごそつぽい触感がある。開くときそれがきしんで、ざらつくのだらうか。

こういう指示は私には大へんおもしろかつた。うす紫に色をさした大根の花には、畑の隅のしいんとしたうら淋しさがあつた。のむらがる蜜柑の花には、元気にいきいきした気分があり、蓮の花や月見草の咲くのには、息さえひそめてうっとりした。ぴたと身に貼りつく感動である。興奮である。子供ながら、それが鬼ごつこや縄とびのおもしろさとは、全くちがうたものだといふことがわかつていた。

ふじの花も印象ふかつた。いったいに蝶形の花ははなやかである。ましてそれが房になつて咲けば、また格別の魅力があ

る。子供たちが見逃すわけがない。ただこの花は取ることができにくかった。川べりの藪に這いかかっているのは危くてだめだし、野生のせいかな花房も短い。庭のものは長い房で美しいが、勝手にとるわけにはいかない。そこで空家の軒とか、廃園の池とかの花の下を遊び場にする。私もそこへ行きたかった。けれども父親からきびしく禁止されていた。そんな場所の藤棚は、一見なんでもなく見えて、実はもう腐れがきいていることが多く、ひよつとした弾みに一度につぶれるから危険だ、という。ことに水の上へさし出して作った棚は、植木屋でさえ用心するくらいで、子供は絶対に一人で行ってはいけない、といい渡されていた。

荒れてはいるが留守番も置いて、門をしめている園があつた。藤を藤をと私がせがむので父はそこへ連れていってくれた。俗にひょうたん池と呼ばれる中くびれの池があつて、くびれの所に土橋がかかつていた。だがかなり大きい池だし、植込みが茂つていて、瓢箪ひょうたんというより二つの池というような趣おもむきになつていた。藤棚は大きい池に大小二つ、小さい池に一つあつてその小さい池の花がひときわ勝すぐれていた。紫が濃く、花が大きく、房も長かつた。棚はもう前のほうは崩れて、その部分の花は水にふれんばかりに、低く落ちこんで咲いていた。いまが盛りなのだが、すでに下り坂になつて盛り返らなかつた。しきりに花が落ちた。ぼとぼと音をたてて落ちるのである。落ちたところから丸い水の輪が、ゆらゆらとひろがったり、重なつて消えたりする。明るい陽ひがさし入つていて、そんな軽い水紋のゆらぎさえ照り返して、棚の花は絶えず水あかりをうけて、その美しさはない。沢山たくさんな虻あぶなが酔つて夢中なように飛び交う。羽根の音が高低なく一つになつていた。しばらく立っていると、花の匂いがむうつと流れてきた。誰もいなくて、陽と花と虻と水だけだつた。虻の羽音と落花の音がきこえて、ほかに何の音もしなかつた。ぼんやりとか、うっとりとかいうか、父と並んで無言たずで佇たずんでいた。飽和エというのがある状態のことか、と後に思つたのだが、別にどうということがあつたわけでもなく、ただ藤の花を見ていただけなのに、どうしてあかも魅入られたようになったのか、ふしぎな気がする。

(幸田文「藤」)

設問

- (一) 「親が世話をやいた」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。
- (二) 「嫉妬の淋しさ」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。
- (三) 「こういう指示は私には大へんおもしろかった」(傍線部ウ)とあるが、なぜおもしろかったのか、説明せよ。
- (四) 「飽和というのがあの状態のことか、と後に思った」(傍線部エ)とあるが、どう思ったのか、説明せよ。